

ナシマルカイガラムシの薬剤感受性と防除方法



ナシマルカイガラムシの被害はこれまで局所的で、マイナー害虫として認識されていましたが、令和4年頃から全国的に発生が急増しました。この深刻な発生動向を受け、令和7年りんご病害虫防除暦（以下、防除暦）から新たな防除対象害虫として正式に記載されることになり、令和8年防除暦では夏季の防除方法も追記されることとなりました。



1 ナシマルカイガラムシの薬剤感受性

本種の感受性を再確認したところ、ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤、IGR剤に対して感受性が低くなっていることが確認されました。

この結果から、薬剤に対して感受性が低下した個体が増加し、近年、りんご園でナシマルカイガラムシの発生が多くみられるようになってきていると考えられます。



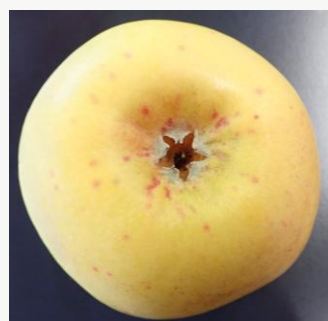
寄生枝



寄生葉



被害果実

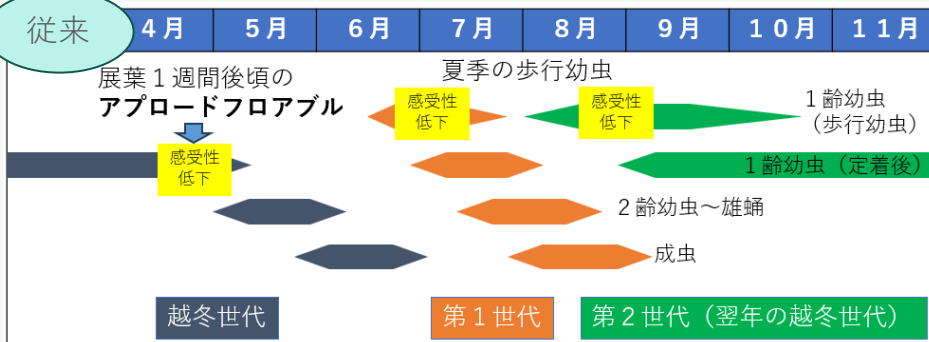


被害果実



2 薬剤による防除対策

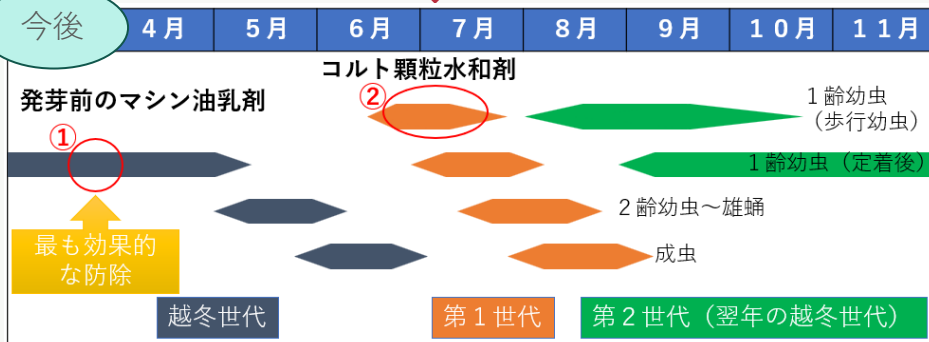
従来



POINT①
越冬幼虫を対象に「**発芽前**」に**マシン油乳剤**を散布しましょう。

発芽前は薬液が枝に付着しやすく、害虫の発育ステージも揃っているため、重要な防除時期となります。

今後



POINT②
第1世代歩行幼虫を対象に「**6月中旬**」に**コルト顆粒水和剤**を散布しましょう。

コルト顆粒水和剤はシンクイムシ類に対する効果はないため、シンクイムシ類防除剤も併せて使用してください。

お問い合わせ りんご研究所 病害虫管理部 (TEL 0172-53-6132)

「令和8年度普及に移す研究成果・参考となる研究成果」も併せてご参照ください。



青森産技

あおもりの未来
技術でサポート